



僕も「坂本龍馬」です～1年間限定雑誌『RYOMA』編集長

「はじめまして、坂本龍馬です」。こんな書き出しで、雑誌やブログをはじめ、約9カ月が経過した。2010年はNHK「大河ドラマ」もあり、空前の坂本龍馬ブームがくるはず。どうせブームになるならとことん乗っかってやろうと、09年10月にプロジェクトチームを始動した。龍馬ゆかりの高知、長崎、京都へは毎月のように出かけている。下関にも10年5月に訪れた。ご存じのように龍馬とお龍さんが暮らした街だ。歴史のある街というのは、肌にその感覚が伝わってくる。龍馬や高杉晋作の魂が今も息づいている感じがして、心惹かれる。難しいが、その息づかいを読者に伝えたい。テレビであろうが、ブームであろうが、どんな理由であれ、龍馬や日本の歴史に接することはいいことだと思う。この坂本龍馬ブームを一過性で終わらせたくない。そして海外の方にも知って欲しいというのが夢であり、今後の課題である。

坂本龍馬(さかもと・りょうま)



歴史上の偉人と同姓同名の出版社員。祖先は高知出身で娘の名前も竜(りょう)。2010年は龍馬の生まれ変わり(?)として、コスプレなどで全国を駆け回る日々。身長177センチ、靴のサイズ26.5センチとサイズも龍馬級。1972年、東京生まれ。『RYOMA』(主婦の友社)は1年間限定でVOL.4(2010年9月末発行)で完結。VOL.4には下関の記事も掲載されている。オフィシャルブログ「龍馬なう」
=<http://blog.shufunotomo.co.jp/ryoma/>



に絶えられなくなったお龍は、衝動的に手にした鋏で自分の髪の毛をすっぱり切り、龍馬の霊前に供えた。その後再婚したが、生涯通して偉大なる夫、龍馬の話ばかりしていたという。

しかし、これほどまでに老若男女に親しまれる人物がいるだろうか。史学界では、歴史をひも解くにあたっては、残された史実に基づき、冷静に歴史を分析する見方が主流というが、下関の人々と龍馬の間に生まれた絆は、いろんな文献や遺品から見ても非の打ちどころもないほど明らかだ。現に、日本に現存する龍馬の肖像写真6種のうち、銅像のモデルにもなった1種を含む4種は、下関の関係者宅で大切に保存されていた。さらに龍馬が書いた約140通の手紙のうち、2割以上は下関の友人に宛てたものだった。また「才谷梅太郎」という龍馬の印が押された資料3点のうち、2点が長府博物館に収蔵されている。これらが意味するものは何なのか。巖流島に渡った時、古城さんが汗をぬぐいながら言った力強い言葉が蘇る。

「龍馬は、大好きな下関の人たちに自分自身を残しておきたかったんだと思

1863年に結成された「奇兵隊及び諸隊士顕彰墓地」。当時10～20代だった青年の墓地を全国から集め、供養している。ボランティア・グループ「箒の会」の方々が月に1回、一帯を掃き清めている。



を求めたんでしようね、もてる男は羨ましい。はははははは」

愉快的な本音トークをすかさずメモする歴女であった。

結核という不治の病を抱えつつも、世界を飛び回り、浴びるように酒を呑み、「平生はむろん、死地に入り難局に処しても、困ったという一言だけは断じて言わなかれ」などの強気な名言を残した晋作。女性はこのように何を考えているのか掴めないアーティストタイプにも翻弄されるんだよなあ。正妻のお雅に対しては亭主関白、愛人おうのの前では甘えん坊と化する晋作。幕末の男の七変化にはかないませんなあ。

大好きだった下関の地で 生き続ける龍馬の魂

龍馬が京都の近江屋で凶刃に倒れた翌日、お龍の夢には「全身朱に染まり血刀を提げてしょんぼりと枕元に座っている（立っている）龍馬」が出てきたという。法事の最中、身を切られるような哀しみ